

書 評

郭淑雲・王宏剛編『生きているシャーマン—中国のシャーマニズム』

原書名：郭淑雲・王宏剛主編『活着的薩滿—中国薩滿教』遼寧人民出版社、2001

Guo Shuyun and Wang Honggang eds., *Living Shamans : Shamanism in China*, Shenyang, 2001.

中村 和之（函館工業高等専門学校）

本書は、中国のシャーマニズム研究者である郭淑雲・王宏剛両氏の近著である。郭淑雲氏は1958年の生まれで、現在は長春師範学院薩滿文化研究所の教授であり、すでに『原始活動文化—薩滿教透視』（上海人民出版社、2001年）という専著がある。また、王宏剛氏は1949年の生まれで、中国の北方少数民族の研究者として著名であり、現在は上海社会科学院宗教研究所上海研究中心の教授の職にある。王氏の著作には、関小雲氏との共著による（黄強・高柳信夫他訳）『オロチョン族のシャーマン』（第一書房、1999年）のように、日本で出版されたものもある。

まずはじめに、本書の構成を以下に示す。

序 … Mihaly Hoppal

はじめに

一、未開から離脱した文化の痕跡—シャーマニズムの祭礼

（一）集団の力で大自然と均衡を保つ—シャーマニズムの自然崇拜の祭礼

（二）神格化した動物と文化英雄の崇拜—シャーマニズムの動物神と主神の祭り

（三）祖先の守護神を呼び起こす—満族の家の祭とシボ族の秋の祭り

（四）文化融合タイプのシャーマニズムの祭礼—漢軍八旗の香と朝鮮族の巫堂の祭礼

二、人と神との仲介：シャーマン

（一）シャーマンの神託

（二）シャーマンの神器、衣装と偶像

（三）シャーマンの占い

（四）シャーマンの治療

三、シャーマニズムと北方民俗

（一）祖先崇拜と系譜・敬老の風習

（二）靈魂の觀念と埋葬の風俗

（三）幸福を祈る風俗

（四）民間の文学

付録1：民族の紹介

付録2：写真の撮影者の紹介

おわりに

著者らが「はじめに」でのべるところによれば、中国のシャーマニズム研究は、1950年代末から

60年代はじめにかけての、中国全土で実施された少数民族社会歴史調査から始まったという。これらの調査の成果は、文革後の1980年代になって刊行され、日本でも見るできるようになった。その後、1980年代になってシャーマニズムについての本格的な調査が始まった。本書は、最近20年間の調査の成果を盛り込んだものである。したがって、その題名が示すように、本書は、今の中国社会に生きているシャーマニズムの紹介を目的とするものである。

本書を見てまず気がつくことは、カラーの写真がふんだんに使われていること、それに中国語と英語の対訳であることである。満洲族・モンゴル族・漢族やエヴェンキ族・赫哲（ヘジェ）族などのシャーマニズムに関わる儀礼の様子やさまざまな祭具などが、解説入りで事細かに紹介されている。対訳になっているので、中国語のシャーマニズム関係の用語に知識がない読者でも、理解を深めることができる。評者のように、北方先住民族の文化に関心はあるものの、専門に勉強した訳ではない者にとっては、格好の入門書といえよう。

評者が特に興味深かったのは、清代のはじめに漢軍八旗に編入された漢族の「漢軍旗香」とよばれる祭礼である。彼らは、満洲族と接触するなかで、仏教・道教ほかの民間信仰にシャーマニズムの動物信仰を加えた祭礼を持つようになったという。本書が紹介するのは、1985年の吉林省烏拉地区の張氏一族の祭礼である。

なお、本書には写真が258点も使われているが、そのすべての写真に、撮影年次と撮影者ないし提供者・機関が明記されており、これ自体が貴重な資料となっている。これらのうち、1957年撮影の写真が2点、1967年が2点、1979年が1点あるが、大部分は1980年代以降の撮影である。編著者の二人が撮影したものもあるが、他の研究者の撮影になるものも多い。そのなかには、赫哲族の研究者として知られる黄任遠氏の名前などが見えている。